

旧柳河藩主立花家別邸庭園に関する研究

永松 義博

庭園デザイン学研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

**Study on the villa garden of Tachibana Family,
the old feudal lord of Yanagawa Han**

Yoshihiro Nagamatsu

*Laboratory of Garden Design, Department of Landscape Architecture,
Minami-Kyushu University, Takanahe, Miyazaki 884-0003, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

南九州大学研究報告 40A 別刷

Reprinted from

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY
40A, 2010

旧柳河藩主立花家別邸庭園に関する研究

永松 義博

庭園デザイン学研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

Study on the villa garden of Tachibana Family, the old feudal lord of Yanagawa Han

Yoshihiro Nagamatsu

*Laboratory of Garden Design, Department of Landscape Architecture,
Minami-Kyushu University, Takanabe, Miyazaki 884-0003, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

At the southwest corner of Yanagawa castle, besides the pond surrounded by the outer canals, there used to be the feudal lord's villa. It was called "Ohanabatake." The villa "Shuukeitei" which was built by Tachibana Kanetora in Genroku 10, was the beginning. The situation of the garden in the old days became clear from depiction of the old pictorial map by Tachibana Family. In a pictorial map, there are many plants including flowering trees and fragrant shrubs around Izumi Oike. Furthermore, the garden is combined with the natural scenery adopted from outside. Water falls from Takiguchi serve mountain stream, fill a vast pond, and flow into canals. As a graceful daimyo garden, we can imagine that they used to be the main hobby and amusement, and a place of rest for them. The garden consists of "Ohanabatake" built in the Edo era, and "Shoutouen" built in the Meiji era. Both are the gardens of rich local color which harnesses geographical features of riverside area of Yanagawa.

Key words: historical garden, Ohanabatake, Tachibana-han, Shuukeitei.

1. はじめに

江戸時代、幕府の体制が安定化するにつれ各藩の庭園整備は進み、多くの名高い庭園が誕生した。江戸には数百の藩がそれぞれ藩邸を構え、庭園も競うように造成された。さらに各藩の城下町にも大名の営む庭園があり、広大な土地を利用し、格式にふさわしい庭園を築造した。江戸時代に花開いた、武家による庭園文化である。九州においても鹿児島島の仙巖園や熊本の成趣園などの大名庭園が造営された。

福岡県柳川地方は、日本の水郷地帯として知られ、利水や治水のためのクリークが縦横に広がっている。柳川市は江戸時代、立花十二万石の城下町として発展した。柳川の城下町をつくるにあたってクリークが利用された。城下町の堀割は城を防御する役割を持つとともに舟運による交通路、灌漑用水、飲料水としても利用されてきた。

本研究は、大名庭園として作庭された旧柳河藩主立花家別邸庭園について、立花家に保存されている文献

史料をもとに庭園の構成・意匠など往時の様子を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究では文献史料調査と現立花家当主立花民雄氏への聞き取り調査、及び現地調査をおこない、その結果を考察した。文献史料調査は、柳河藩立花家文書を所蔵する御花史料館、柳川古文書館などの史資料のなかから絵図、文献、古写真などを収集した。現地調査では2007年12月から2009年8月にかけて庭園の実測調査、植栽木調査などをおこなった。

3. 庭園の概況

旧柳河藩主の立花家別邸庭園は、柳川市新外町にあり、城郭の南西部に立地している。別邸庭園は大書院に面した松濤園と屋敷東に位置する東庭園とで構成さ

れている（写真1）。写真2に松濤園の全景、写真3に東庭園の現況、図2に東庭園の実測図を示した。

4. 御花畠

柳川城の西南隅、外堀に囲まれた地はかつて柳河藩の別邸があった。往時別邸は「お茶屋」「御花畠」と呼ばれていた。

柳河藩主の別邸が「御花」と呼ばれるようになったのは、「花畠」という地名であったこの地に別荘を構えたことに由来している（図3）。立花家4代当主鑑虎が元禄10年（1697）に別荘を築いた際に造られた「集景亭」がその始まりであったといわれる（図1）。鑑虎は造園趣味の持ち主で、造園分野への造詣も深く、江戸藩邸の柳河藩上屋敷にも如意亭（東庭園）を造成している。御花畠は政務を執る城と異なり、こちらは景色を眺め、心を癒す休息の場として造営したと思われる。「御花畠日記」によると政務を癒す目的から御花畠に立ち寄るケースと、ここで生活する別宅的な場所性があったようである。いずれにしても、「御花畠」は藩主の私的な空間であり、藩主の家族たちが日々の生活を営む屋敷であった。江戸時代の「花園池」は、後の東庭園のことであり、現在の松濤園よりも東に位置していたと考えられ、庭園東面にある築山部分に往時の面影を偲ぶことができる。写真4は明治42年に撮影された東庭園の様子である。池岸の亭と御隠亭の背後に大広間・西洋館・御居間が建ち並び、松の大木も確認できる。

立花家には美しい色彩の古絵図（御花畠図）が保存されており、藩政期に作庭された当時の庭園の様相が具体的に現されている（図4）。庭園には、広大な池泉を中心にサクラ、モミジ、スギ、ツバキ、ウメ、シダレヤナギ、ソテツ、モモなどの樹木やショウブなどの色香の優れた植物が多数描かれている。庭園の地割を見ると、池の周りを巡りながら観賞して歩く回遊式の庭園であり、池と築山で高低の変化を与えていることなどが読み取れる。堀割水を取水できる土地の条件を素直に活かしたと考えられる自然風の池泉が庭園の中心的構成となっている。池泉の線型も複雑な京風庭園とは異なり、おおらかで単純な線型や水面のひろがりやが爽やかな気分を演出している。池泉回遊式庭園は、江戸時代の大名庭園に広く採用され、この時代を代表

する庭園様式となったものである。「柳河明證図會」（1826）に描かれた「花園池」からも往時の庭園の様子を知ることができる（図5）。庭園は西側から描写されており、御茶屋と屋敷（集景亭）からの観賞を主に築庭されたと考えられる。庭園の東側、堀割沿いには小高い丘を設け、中の周遊路に変化を与えている。沢飛び石で集景亭と結ばれ、建物の脇には縁先手水鉢がみられる。泉水の向こうには、富士形の築山が設



写真1. 松濤園・東庭園の航空写真（2007.3）



写真2. 松濤園全景（2007.5）



写真3. 東庭園の現況（2007.9）

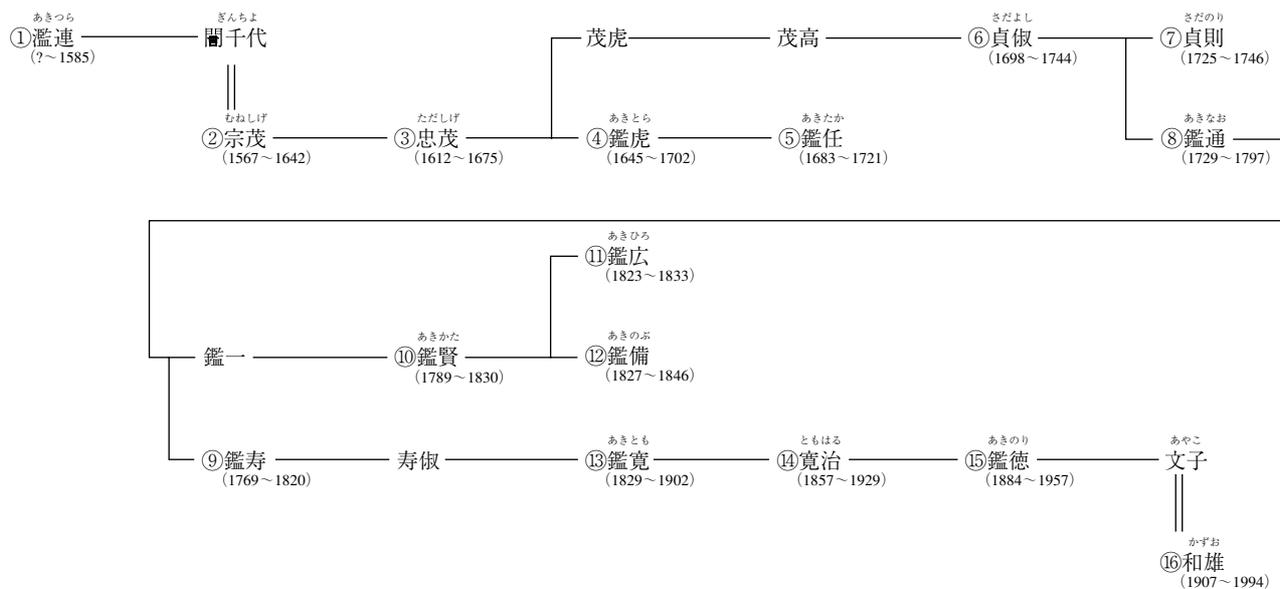


図1. 立花家当主系図



図2. 東庭園実測図



図3. 御家中絵図（弘化年間（蒲池文書，柳川古文書館所蔵））



図4. 御花島古絵図（御花史料館所蔵）

けられ、鬱そうと繁った樹木も含めて立体的な庭園構成となっている。巨大な築山は江戸期に流行したものであり、地形変化の乏しい柳川にあって、高い築山にあこがれをよせたとも考えられる。南東側のゆるやかな築山には園亭が設けられている。築山は園景のランドマークであり、園全体をパノラミック

に眺めるための展望地点でもあったと思われる。滝口は庭園の正面（東側）築山付近の一步奥まった部分に設け、常緑樹の植栽を行い奥行き感を出している^{注1)}。深山から流れ落ちる落水は音の効果とともに垂直的な力を与え、空間構成上の大きな役割を果たしていたと思われる。落水は溪流となり広々とした池に注ぎ、亭の縁先をくぐって堀割へと流れ出ている。池中には、州浜と小高い中島を設け、反橋が架けられている。もうひとつの小島は岩島で、雪見灯ろうを配し変化と奥行きを与えている。池庭でよく見られる滝・池・中島は庭園の重要な構成要素であり、その組み合わせの全体構図は美しく、豊かな風情が感じられる。園内には神社や鳥居も見受けられ、信仰の深さを具現しているともいえる。

他に庭園の様子を透視画風に描写した春夏秋冬の絵画資料も残されている。絵図には、雪景色の他に梅、桜、紅葉の林が色づく姿が描かれている（図6，図7，図8，図9）。さまざまな風景をつくる回遊式庭園のなかで、園亭や神社などの建造物だけでなく、花木の植栽は季節を知る上でも、それぞれの部分の風景の特色をだすためにも重要な構成要素だったことを見とることができる。豊かな緑や水に恵まれ、夏の涼や秋の月を愛でながら、その四季の風情を楽しむやすらぎの空間であったことがわかる。さらに御花島は堀割沿いに位置しており、豊富な水資源と広大な土地を活かした潮入庭でもあった。大名庭園と呼ぶにふさわしい、のびやかで優雅な庭園として、趣味・娯楽さらには休養のための心とませる私的な慰楽空間であり、江戸時代の後期の名園であったことが想像できる。

5. 集景亭八景

「柳河明證図會」（1826）には、名所・風景に関する記述がある。庭園内の景色あるいは借景の美しさを表したもので、柳河藩の儒教者安藤省庵が選び取った印象的な土地の風景が詠まれている。つまり庭園から眺められる実際の風景を、八つの特徴的風景として気候的变化や事象とともに説明している（図10）。瀟湘八景にならって漢字熟語の豊富な意味合いを風情の表現に活用しているが、中国文化への憧憬も垣間見ることができ、興味深い。

記載されている八景は（1）柳城朝暾（2）坂本暁鐘（3）沖端返照（4）吉富暮靄（5）宮永落雁（6）雲泉残雪（7）黒崎晴嵐（8）清水秋月である。

上の二文字に地名、山名などの固有名詞を置き、下の二文字が表現する情景をより理解しやすいものにしていく。「朝暾」「暁」は朝の太陽、夜明けなどの時間が表現されている。「秋月」「残雪」は清水山の上にさえ渡る秋の月、雲仙の山に消え残る雪など借景の美しさと季節の景色を表している。「返照」「暮靄」「晴嵐」は沖端に夕日が映える光景や吉富の夕靄の風景、晴れた日に吹きわたる山風といった気象を表している。「落雁」は晩秋に雁が舞い降りてくる風景、「暁鐘」は坂本から耳に聞こえる夜明けの音の風景が詠まれている。ここには気象、季節、時間、生物、音などフルに



図5. 花園池（柳河明證図會）



図6. 御花島春の図



図8. 御花島秋の図



図7. 御花島夏の図



図9. 御花島冬の図

五感に訴える情景が表現され、庭の味わいをさらに深めてくれる。

「集景亭八景」は、庭園を味わう視点とともに、態

度や作法まで含めたエキスを記した「八景式風景観」ともいえる。

かつて藩主は慰楽のためここに来て四季折々に詩や

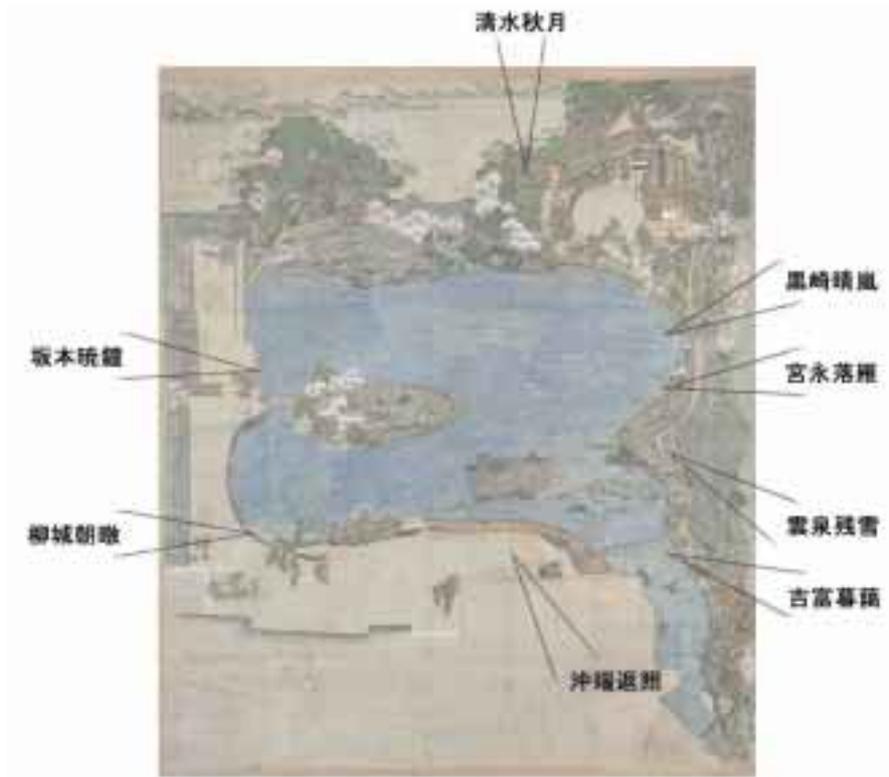


図10. 集景亭八景

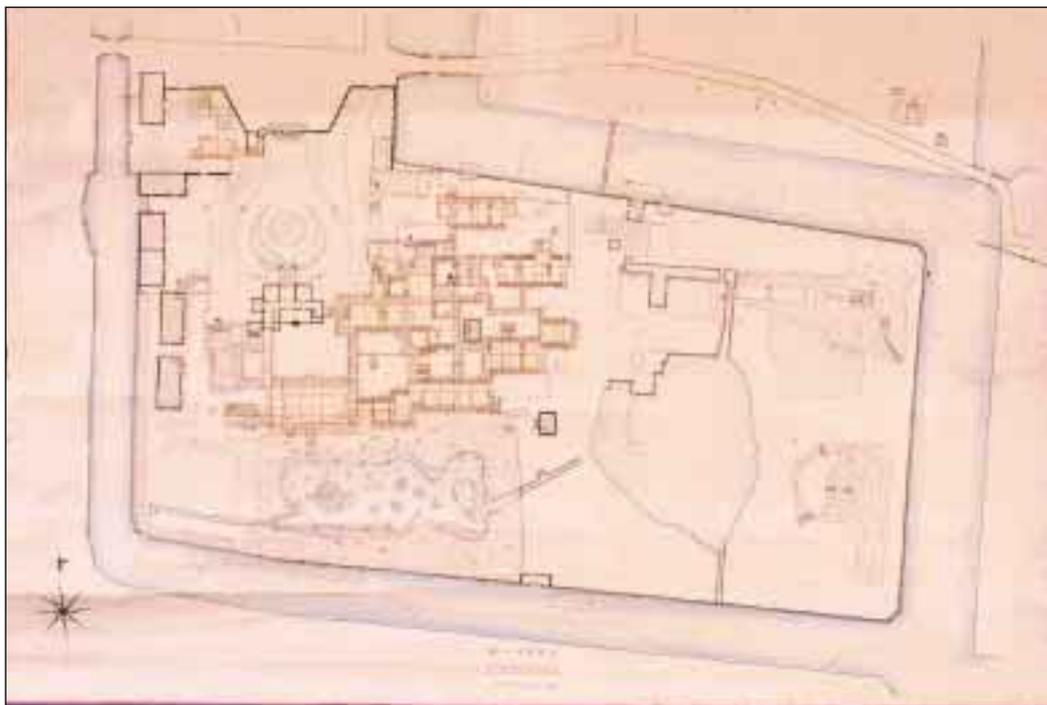


図11. 御花島敷地図（御花史料館所蔵）

歌を詠んだり、景色を眺め楽しみ、心を癒したことが推察される。

さらに「柳河明證図會」に、往時の庭園の様相を「仮山も大なれば密林雲を出し、池水も流れては急瀬

玉を瀬く。この園地天工施設に異ならず」との記述がある。「築山も大きければ、密林から雲が湧き出し、池の水も流れては、早瀬となり水玉をはじくように流れる。この園池は自然そのものといっても過言ではな



写真4. 明治42年頃の東庭園



写真7. 大正前期頃の松濤園



写真5. 明治44年頃の松濤園



写真8. 昭和9年頃の松濤園



写真6. 南側の堀割から屋敷地をみる（明治42年）

い」と解釈できる。この記録からも自然味豊かな庭園の様子を窺い知ることができる。

6. 松濤園

松濤園は藩主立花家の別荘庭園で柳河藩主第13代鑑寛が別荘を築いた際に造られた御隠亭御庭が起源で

あったと考えられている。立花家の建物は「西洋館」と呼ばれ、明治43年（1910）ごろに完成したもので、明治の木造建築を代表するものである。おそらく建物が増築された折に、現在の大書院南庭の松濤園の大部分に手が加えられたと思われる。写真5は、明治期（明治44年）の松濤園作庭時の状況である。現在の庭園石組みは、ほぼ当時のままであり、築造当初を偲ぶことができる。

図11は、大正初期に描かれた屋敷全体の図である。縮尺は「二百分之一」で描かれている。東側の池や神社も描かれ、東側の池を臨む位置に移築された御隠居亭が実線で描かれている。松濤園の池泉は東庭園の池泉を介して周囲の堀割につながっている。このため有明海の干満がそのまま池泉の水面を上下させ、松島の景を一層味わい深いものになっている。

写真6は、南側の堀割から松濤園をみた古写真である。松濤園が改修された明治42年に撮影された写真であるが、堀割沿いには、クロマツの植栽が確認できる。写真7は、大正期の松濤園である。大広間の前庭には、クロマツを小さく仕立てた植栽が確認できる。写真8は、昭和期（昭和9年）の松濤園の古写真である。いずれも変遷の様子を知る貴重な史料である。

現在の松濤園はその呼称のとおりクロマツに囲まれた池庭である。クロマツ一色の樹林によって構成され、座敷からの眺望を主とした観賞式の庭園であるが、明



図12. 松濤園実測図（重森三玲他実測図を一部修正）

治43年頃の松濤園は、庭園の南側の堀割沿いのみクロマツの植栽がなされていたことがわかる。土地の高低差は、1m余で築山らしい造成もなく平面的である。池の形は矩形で東西に長く、庭園面積2800m²、池の深さは1.0m、池面積は1300m²で、庭園全体の5割を占めている（図12）。池水は外の城堀南の堀割水を東庭園の池泉に引き込み、庭園から水路で導水している。東から池に流し、西に抜け、屋敷の下をくぐって灌漑用水となっている。園内には約280本のクロマツ、庭石1500個、石灯笼14基があり、沓脱石の巨石は旧天守閣の台石を移したといわれる。園池の中の2島と多数の岩島および水面は冬場に500羽の野鴨の群でおおわれるということである。

おおらかで優美な庭景を見せる松濤園は日本三景の奥州・松島の景をリアルに写した写景的「縮景」である。池水は有明海の干満の影響を受け、潮の満ち引きによって水位が増減する潮入の池である。水位の上下にともない園地の護岸や岩島などの庭園景観が変化する形式であり、松島の景を一層味わい深いものになっている。池庭には、大小の中島や岩島を配し、大海を象徴しているが、多くの岩島を池中に配した池庭は他に例がなく、秀逸な景色を造り出している。

松濤園の水系と水景には非凡な技術がみられ、意匠的にも技術的にも洗練された姿をみることができる。

7. おわりに

旧立花家別邸庭園は、江戸期の御花島を起源とした東庭園と、明治期に整えられた松濤園の二つの庭

園で構成されている。御花島の往時の様子は、立花家に残されている古絵図（御花島図）や「柳河明證図會」の花島園池の描写から明らかになった。庭園は堀割や河川の水系や地形など、自然的背景を活かした水郷ならではの大名庭園である。柳川城郭を中心に広がる水路網は藩政期のものをほぼ継承しており、平野と潮の干満の影響を受ける堀割水を利用し、導水と排水をおこなう流水システムが機能していたと思われる。池泉は流れる特性をもち、有明海の干満がそのまま池の水面を上下させる、動きのある潮入庭でもある。また安藤省庵の『集景亭八景』では、熟語の持つ意味合いが重ねられ、園外景観をとり入れた大自然の眺めや周辺環境と一体となった作庭などが読み取れる。松濤園の池水は東庭園から取水し、東から西に抜け堀割へと流されている。東庭園の趣を意識し、庭園に対する興味の高まりが、後の松濤園作庭へとつながっていったと考えられる。

江戸期の作庭と明治期の作庭の二つの庭園で構成されている旧立花家別邸庭園は、いずれも大池泉を主とした景観構成で、水郷柳川の地勢を活かした郷土豊かな庭園であるといえる。

要約

柳川城の西南隅、外堀に囲まれた池はかつて大名の別邸があり、「御花島」と呼ばれていた。立花家藩主鑑虎が元禄10年に築いた別荘「集景亭」がその始まりである。立花家に保存されている庭園の古絵図の描写から往時の庭園の様子が明らかになった。絵図には大池

泉を中心に花木や色香の優れた植物が多数見受けられる。さらに庭園は、園外の自然風景をとり入れた構成になっている。滝口からの落水は溪流となり、広大な池に注ぎ、堀割へと流れている。優雅な大名庭園として、藩主の趣味・娯楽・さらには休養の場であったことが想像できる。庭園は江戸期に作庭された「御花島」と明治期に作庭された「松濤園」で構成されている。いずれも池泉を中心とした庭園で水郷柳川の地形を活かした郷土色豊かな庭園である。

謝 辞

今回この研究をすすめるにあたり、立花家関連の古絵図や古写真の提供や聞き取り調査にご協力頂いた御花史料室才藤あずさ氏に心より感謝申し上げます。また当研究室、園分亮君にデータの整理に多大の助力をいただいた。心から感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 永松義博（1985）柳川市における水環境と庭園形態に関する研究，造園雑誌 **48** (4)：268-275.
- 2) 広松伝（1990）柳川堀割から水を考える，藤原書店，265pp.
- 3) 永松義博（1994）九州地方における歴史的日本庭園の特性に関する研究，造園雑誌 **57** (4)：346-352.
- 4) 永松義博，池田二郎（1995）長崎県神代地方における水環境と庭園形態に関する研究，日本庭園学会誌 **3**：10-18.
- 5) 永松義博（1995）Relation Between Canal and Type of Gardens in Yanagawa City，日本庭園学会誌 **3**：19-38.
- 6) 永松義博（1996）柳川市における堀と庭園形式に関する研究，南九州大学園芸学部研究報告 **26** (A)：21-41.
- 7) 永松義博（1997）地域環境と庭園形式に関する研究，南九州大学園芸学部研究報告 **27** (A)：23-34.
- 8) 永松義博，田島基記（1998）地域環境と庭園形式に関する研究Ⅱ，南九州大学園芸学部研究報告 **28** (A)：35-47.
- 9) 有馬学（2003）新柳川明証図会，柳川市，394pp.
- 10) 永松義博，日高英二（2008）城下町秋月の町並み構成と庭園の特性に関する研究，南九州大学研究報告 **38** (A)：19-29.
- 11) 西原一甫，柳河明証図會，柳川古文書館収蔵.

注

- 注1) 立花民雄氏への聞き取りによれば，落水は水車の動力であったようである。